

# ひびき

● 歌手・作曲家 木村 弓

## 心の奥にひそむ輝きを声にのせ

たくさんの人たちに私の歌を聴いていただけのきっかけとなった、宮崎駿監督『千と千尋の神隠し』の主題歌「いつも何度でも」は、映画が封切られる2年前、1999年の春に、作詞の覚和歌子さんと作った歌です。初めて公の場で歌ったのは、その年の5月に山梨県忍野村で行われた「忍野しほくさま祭り」という障害のある方たちが参加されるイベントでした。なぜかその後も、障害のある方々とのご縁があり、今でも施設が主催するコンサートなどにはよく声を掛けていただきます。

私が歌の道に進みたいとはっきり感じるようになったのは比較的遅く、ピアノを専攻し大学4年を終えてからでした。声楽の勉強を始めて1年ほど過ぎ、ようやく声も安定して先が見えてきたと思われた頃、突然体調に異変が起こり、腸や内臓が一挙に下垂して脊髄が引っぱられるような感覚と共に、背すじが伸ばせなくなりました。さまざまな体調不良が併発し、腹式呼吸もまっただけできなくなってしまったのです。それは歌い手にとって致命的なことでした。声域も以前の3分の1に狭まり、音量もなくなって、練習すればかえって声が出なくなる

うようになり、そこでの友人たちとの出会いにも助けられ、体調の両面で、さらに元気を取り戻していきました。

そうしたご縁の中で、ドイツの竖琴でライアーという楽器にも巡り会い、弾き語りや曲作りも少しずつできるようになっていきました。『千と千尋の神隠し』の主題歌「いつも何度でも」や、倍賞千恵子さんが歌ってくださった『ハウルの動く城』の主題歌「世界の約束」も、ライアーを弾きながら浮かんだ曲です。

映画のヒットのおかげで演奏の場も広がり、多くの方々にご覧いただけるようになりました。良い出会いにも恵まれ、とても有り難く思っています。体調もさらに少しずつ回復し、フルのステージが重なっても元気でコンサート活動を続けられるようになりました。ただ100パーセント元の健康状態に戻るまでには、もうあと少し時間がかかるようで、残念ながら歌手の命とも言われる呼吸が、まだ完全に自由とはいえません。今でも、テレビに映る自分の歌う姿を見るたびにがっかりしま



### プロフィール

きむら・ゆみ

大阪生まれ。米カリフォルニア州立大学にてピアノを専攻。1988年に竖琴ライアーに出会い、独自のスタイルの弾き語りを確立。2001年、宮崎駿監督作品『千と千尋の神隠し』の主題歌「いつも何度でも」を作曲して歌い、日本レコード大賞金賞などを受賞。2004年の『ハウルの動く城』でも、詩人・谷川俊太郎氏と共作した「世界の約束」が主題歌として起用される。これまでに徳間ジャパンコミュニケーションズより、7枚のアルバムをリリース。



という状態。少しずつでも何かを積み重ねる努力ができないことが、非常につらく感じられました。病院に行っても原因がわからず、目の前が真っ暗な日々が、その後しばらく続きました。が、幸運にも良い先生との出会いがあり、食事療法や瞑想などを通して、ゆっくりとですが体調が改善していきました。

また、日本古来の武道、伝統芸能、健康法などをもとに現代人にも合うエクササイズとして開発された身体術の稽古にも通すが、これらの課題も楽しみながら受けとめて、遅からず完治できればと願っています。

過去を振り返ってみて感じるのは、逆境は素晴らしい贈り物も同時に与えてくれるということです。苦しさを体験したおかげで、苦しいと感じる心のもっと奥深くに確かに存在する光にも気付かせていただけたように思います。それは私にとって、余分なものを全部取り払った、素朴の中の素朴、故郷の故郷とも感じられるような、一つの眩い世界とでも言いましょうか。歌う時も心にそのような光を意識し、また少しでもそれを声にのせることができると思うようになりました。きっとその光は誰の心の中にもあって、歓びや感謝、畏敬の念のような、非常に肯定的で深い感情を呼び覚ますものだと思うからです。

障害をもつ方々の会のコンサートでいつも有り難く感じるのは、歌の表面的な要素に捉われることなく、歌を通してその場に立ち上がるバイブレーションのようなものに、非常に素直に反応し、共感してくださる方が多いことです。そして私自身、なぜか、どこかさわやかな気持ちにさせていたのです。

昨年12月に千葉県で、星野富弘さんの花の詩画展の開催に合わせて、詩の朗読なども含めたコンサートをさせていただく機会に恵まれました。星野さんの、あの虚飾とは無縁の清々しい世界にも後押しされてか、私も、いま与えられている状況の中で、精一杯シンプルに、そしていのちの故郷のような輝きをもっと実感して歌えるようになりたいという願いが、最近さらに強くなってきたように思います。それが、とてもうれしく感じられる今日この頃です。